



十 和へ向かう国道381号と下津井へ向かう国道439号の分岐となる大正新橋東詰から439号を北進すると、ちょうど3kmで大奈路の街に着く。中津川が櫛原川に流入する地点である。

大奈路は、国道沿いの集落と、中津川を少し遡った両岸に拓けた「八足（はつそく）」、それに櫛原川を遡って木屋ヶ内を越え、さらに津賀ダムまで行ったところにある「古味野々（こみのの）」の三つの集落で構成されている。「古味野々」は飛地である。

本村は、古来から宿場町のような賑わいであったのではないかと思わせる風情があり、事実江戸期には、中津川村・西の川村などを支配する庄屋がここに置かれたというから、当時から「街」であったのであろう。戦国期や江戸期の文献に残されている記録でも、周辺他村に比べて人口が多いことがわかる。

奈路という地名は町内を含め県内各地にあるが、それらのほとんどは「平坦な」とか「なだらかな傾斜地」という意味の「なろい」から来ている。急峻な土地が多い中、人々は、少しでもなだらかな場所を求めたのであろう。

窪川方面から国道381号で旧大正町に入り、さらに439号を町の北端の下津井まで走ってみると、なるほど、首都・田野々に次いで東の北ノ川、北の大奈路が「二つの要になる街」だったことがうかがえる。大奈路は「矢立街道」という往還道（昔の国道）の起点でもあり、この櫛原へと向かう往還道は、各集落へも網の目のように延びていた。大奈路は、古くから交通の要でもあったのである。しかし、昭和初期に森林軌道が敷設されるまでは、対岸の西ノ川側の方が、江師や田野々へのアクセスが良く、また西ノ川側へ渡る橋もかかっていたというから、近代になつてから急速に「中心地」らしさは増したようである。事実、尋常小学校が先にできたのは西ノ川であった。明治30年のことである。しかし、明治35年には、西ノ川尋常小学校を廃止して大奈路に尋常小学校を設置することが決まる。設置場所は、庄屋宅の空き地や作業場だったところ。現在の旧大奈路小学校の敷地である。こ



天満宮。手入れがゆきとどいている。

の場所では、明治10年代半ばに寺子屋のような形で授業がおこなわれていたらしく、また、同18年頃には大奈路組合巡回授業場という名称になつていたという。このことは、大奈路という地区を知る上で、たいへん興味深いことである。

明治10年代といえば、東京や大阪、京都などの中心地から遠く離れた、このような辺境の地は、まだまだ文明的には江戸期の中にあると言つて良い。その地で、寺子屋を開かなければならぬという、学問の需要があつたことを物語っている。庄屋の子息だけではなく、それ以外の階級の子息までもが、家業を手伝う時間を割いて学問を身につけようとしていたという証左でもある。実はこのことは、明治維新直後の、この国の就学率が、欧米の多くの国と比べて飛び抜けていたという事実にも通ずる。ただ、明治期の大正村（町）役場が、村民全体の教育意識の低さに苦労していたことが、大正町史には記されている。しかし、もしかすると、大奈路というところは、行政側の期待通りでなかったにせよ、住民の向学心の基礎はあつたのかもしれない。

想像の域を出ないが、大奈路集落の産土神、つまり地区住民の神様が、天神様（天満宮）であること、関係があるのかもしれない。こんな山奥であるのに、あの「学問の神様」菅原道真を祀った京の都の北野天満宮から勧請を許され、分祀できていることからしても、当地にほとんどの人物がいたのではない。また、その天神様を代々祀ってきたことで、自ずと学問の重要性が信仰を通じて醸成されてきたのかもしれない。

町のうごき

(6月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	
男	7,614	- 2	男	6	13	16	11
女	8,301	- 7	女	5	15	16	13
計	15,915	- 9	計	11	28	32	24
世帯数	8,192	- 6	(6月中の届出)				
窪川地域	11,299人	大正地域	2,210人	十和地域	2,406人		

四万十川の
水質状況

適正值(mg/l)
リン酸
硝 酸
アンモニウム
アニオン活性剤
化学的酸素要求量

四万十高校自然環境部の都合により
しばらくの間調査を
休止します。

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部